

論文の内容の要旨

氏名：山本真菜

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：ステレオタイプ抑制における代替思考の役割と個人差

本論文では、ステレオタイプ抑制による逆説的効果を低減することができる代替思考の内容と、その代替思考の利用しやすさの個人差について検討した。本論文は、第Ⅰ部の序論、第Ⅱ部の実証研究、第Ⅲ部の総合考察で成り立っている。

第Ⅰ部は、第1章から第3章で成り立っており、本論文が扱う問題について述べた。

第1章では、まず、ステレオタイプに関する用語の定義を行い、ステレオタイプがどのように形成されまた変容するかのメカニズムを紹介し、ステレオタイプの内容に関する研究を紹介した。さらに、ステレオタイプ化には自動的な過程と統制的な過程があるが、統制的な過程において意識的にステレオタイプを統制できたとしても、それに伴う問題点があることを述べた。ステレオタイプを意識的に抑制すると、その後かえってステレオタイプ的な判断をしてしまうという逆説的効果がある。

第2章では、ステレオタイプの意識的な統制であるステレオタイプ抑制を取り上げ、ステレオタイプ抑制の弊害である逆説的効果を扱った研究について紹介した。さらに、逆説的効果を低減するための方略として抑制中の代替思考を扱った先行研究のレビューを行った。先行研究を踏まえ、ステレオタイプ抑制における対象集団に関連する代替思考として、ステレオタイプの反対の内容である反ステレオタイプの特性と、対象集団に対する当てはまりの程度が相対的に弱い非優位ステレオタイプの特性があること述べ、優位ステレオタイプを抑制する際に、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されにくい、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいという仮説を立てた。

第3章では、ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差について述べた。まず、逆説的効果の個人差に関する先行研究を紹介し、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差が逆説的効果に関係している可能性を提示した。非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性のひとつとして認知的複雑性があることを提案し、認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を立てた。

第Ⅱ部は、第4章と第5章で成り立っており、第Ⅰ部で述べた仮説を検証するために行った7つの実証研究を紹介した。

第4章は、研究1から研究3で成り立っており、優位ステレオタイプを抑制する際の、対象集団の非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての役割を検討した。

研究1では、非優位ステレオタイプの特性のひとつとしてサブタイプに関する特性を用いた。サブタイプは、ステレオタイプに一致しない成員からなる下位集団であり、対象集団のなかの少数の成員にしか当てはまらないと考えられるため、非優位ステレオタイプの特性に当てはまると考えられる。サブタイプに関する特性を用いて、代替思考としての有効性を検討した。その結果、サブタイプに関する特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減されにくいことが示されたが、事後的な調査によって、研究1で使用された代替思考の内容は反ステレオタイプ的な特性であることが示された。事後的な調査の結果を踏まえると、研究1の結果は、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されにくいという可能性を示唆している。

研究2と研究3では、対象集団に対する当てはまりの程度を直接測定して、非優位ステレオタイプの特性を選定し、その代替思考としての有効性を検討した。

研究2では、優位ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって、非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討した。その結果、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減されやすいことが示された。

研究3では、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプの特

性に対するアクセス可能性を潜在的に測定した。研究 3 では、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合と比較し、さらに、非優位ステレオタイプの特性の非優位性によって代替思考としての役割が異なるかどうかを探索的に検討するために、非優位ステレオタイプの特性のなかでも当てはまりの程度が相対的に強い上位の非優位ステレオタイプの特性と、相対的に当てはまりの程度が弱い下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考とする条件を設けた。その結果、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、代替思考を用いずに単純に抑制する場合、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合に比べ、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が低いことが示された。この結果から、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、抑制対象である優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりにくいこと、逆説的效果が低減されやすいことが示唆された。

第 5 章は、研究 4 から研究 7 で成り立っており、優位ステレオタイプ抑制による逆説的效果の個人差を検討した。第 4 章では、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的效果が低減されやすいことが示されたが、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性には個人差があると考えられる。そこで、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差と逆説的效果との関係を検討し、さらに、この非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性のひとつとして認知的複雑性を取り上げ、認知的複雑性と逆説的效果との関係を検討した。

研究 4 では、認知的複雑性を扱う前に、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と優位ステレオタイプ抑制による逆説的效果の関係を検討した。その結果、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、逆説的效果が生じにくい可能性が示された。

研究 5 では、この非優位ステレオタイプの特性の個人差の背後にある認知的特性のひとつとして認知的複雑性を取り上げ、これらの関係を検討した。その結果、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど認知的複雑性が高い可能性が示された。

研究 6 と研究 7 では、認知的複雑性による逆説的效果の差異を検討した。

研究 6 では、ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって、認知的複雑性による逆説的效果の差異を検討した。その結果、認知的複雑性が高い個人は逆説的效果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的效果が生じやすいことが示された。

研究 7 では、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって、認知的複雑性による逆説的效果の差異を検討した。その結果、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行った場合と行わなかった場合で、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性に差はなかったが、認知的複雑性が低い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行った場合は、行わなかった場合に比べ、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高いことが示された。この結果から、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行う際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすいので、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりにくく、逆説的效果が生じにくいことが示唆された。

第 III 部は、第 6 章から第 8 章で成り立っており、第 I 部と第 II 部を踏まえて総合的に考察した。

第 6 章では、研究 1 から研究 7 で得られた知見の概要を述べた。まず、第 4 章の研究 1 から研究 3 では、ステレオタイプ抑制の際の、対象集団に関連する代替思考として、対象集団に対する当てはまりの程度が弱い非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的效果が低減されやすいことが示された。次に、第 5 章の研究 4 から研究 7 では、逆説的效果を低減することができる代替思考である非優位ステレオタイプの特性にはその利用可能性に個人差があり、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人は逆説的效果が生じにくく、さらに、この非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性である認知的複雑性が高い個人は逆説的效果が生じにくいことが示された。

第 7 章では、本論文の意義と今後の展望を述べた。本論文は、ステレオタイプ抑制による逆説的效果を低減できる有効な代替思考を提案したことと、逆説的效果の認知的な個人差として、認知的複雑性があることを示した点で、ステレオタイプ抑制の研究に示唆を与えたと考えられる。さらに、本論文は、対象集団に対する捉え方の認知構造を変容させることで、ステレオタイプ抑制による逆説的效果を低減することができる可能性を示した点で実際的な意義もあると考えられる。本論文の展望としては、ステレオタイプの優位性の確認の必要や、どのような情報が認知的複雑性を高めるかを検討する必要について述べた。

第 8 章では、本論文の結論を述べた。本論文の知見から、対象集団やその集団に所属する成員を多次元的に捉えることで、ステレオタイプ抑制の弊害である逆説的效果を低減できることが示唆された。